

「-196°C 前編」

—初稿—

2025/8/19

さいの

〈人物表〉

長富 慶三 ながとみ けいぞう (48)

丸バツ署・刑事課の警部補

小西 純也 こにし じゅんや (39)

長富の部下・巡査

原中 進 はらなか すずむ (58)

丸バツ大学の物理学教授

山根 海舟 やまね かいしゅう (44)

原中研究室の研究員

1. 丸バツ大学・研究棟・実験室（昼）

実験室には無数のコードが繋がれたコンピュータや、ゴムチューブに繋がれた金属の容器など、実験用の機材で溢れている。ゴォーンという機械の重低音。白衣姿の原中進（58）、一人で黙々とPC作業をしている。他には誰もいない。ピピピピっというタイマーの音。原中、顔を上げる。

2. 丸バツ大学・研究棟・小実験室（昼）

六畳ほどの小実験室内には、液体窒素の供給装置と、装置に繋がれた金属のデュワー瓶。瓶の口からはモクモクと蒸気が上がっていて、室内の下の方は霧が掛かっている。瓶の側面には霜がびっしり。原中、扉を開けるや否や、中の様子に目を見開く。咄嗟に口元を白衣の袖で覆うが、気絶し、倒れる。タイマーのアラーム音が鳴り続けている。

3. 丸バツ大学・外観（昼）

真夏の太陽。けたたましい蝉の鳴き声。

4. 丸バツ大学・研究棟・原中研究室（昼）

来客用ソファに座る丸バツ署の警部補・長富慶三（48）と、巡査・小西純也（39）、ハンカチで汗を拭いつつ、ペットボトルの水を飲んでいる。壁には原中の写真や、数々の賞状。

山根 「先生は、日本の低温物性研究の権威だったんです」

と、向かいに座る研究員・山根海舟（44）。

小西、ポカンとした顔。

小西 「テイ、オン、えっと？」

山根 「要は、物質を冷やしたらどうなるか、という学問です」

小西 「えっと、今の季節にぴったりそうな研究ですね」

と、愛想笑いして、水を一口。

山根 「……今から百年以上前、あるオランダの物理学者が、水

銀をマイナス269度まで冷やすと、電気抵抗がゼロになるという大発見をしました」

小西、理解するのを諦めて、苦笑い。

長富、割って入って、

長富 「超伝導、ってやつですね？」

山根、頷く。

小西 「長富さん、よく知ってますね」

長富 「たまたまテレビで見ただけ」

山根 「その通りです。電気抵抗の無い金属が実用化されれば今の産業や生活は一変し、エネルギー問題にも役立ちます」

長富 「素晴らしい」

山根 「ですがマイナス269度は液体ヘリウムなど希少な物質を使って冷やさないと達しない温度です。実用化には、より高温で超伝導を示す物質を見つける必要があります」

長富 「高温？」

山根 「具体的にはマイナス196度以上です」

小西 「キンキンじゃないですか」

山根 「これは液体窒素の沸点です」

山根、両手のひらで空を切って見せて、

山根 「窒素は大気中に最も多く存在する気体で、どこにでもあります。液体窒素の温度で超伝導を示す物質があれば、グッと実用化に近づくわけです」

長富 「なるほど。その液体窒素で今回、事故が起きたと」

山根、頷いて、

山根 「原中先生は人類が百年以上探し求めていた、答えと言える物質をようやく見つけたんです。今はその論文発表に向けた準備の真っ最中でした」

長富 「それは惜しい方を亡くされましたね」

と、一礼。小西もそれに倣う。

長富 「あの、一応形だけ現場検証をしても？」

5.

丸バツ大学・研究棟・小実験室（昼）

床には原中の倒れていた形にテープが貼られている。三人、液体窒素の供給装置を前にして、

長富 「これがその液体窒素の供給装置ですか」

山根 「ええ」

長富 「なるほど。これを押したらドリンクバーみたいに出てくるわけですね」

と、操作盤のスイッチに手を伸ばす。

長富 「押してみても？」

山根 「……構いませんよ」

長富、スイッチを押下。供給装置が作動し、デュワ
ー瓶に液体窒素が注ぎ込まれていく。

供給装置と瓶の間は密閉されてはおらず、微かに、
白い煙が漏れている。

小西、焦って口元を押さえて、

小西 「ちょっと、これ大丈夫なんですか」

長富 「何が？」

小西 「だって原中さんはこの毒ガス吸って死んだんでしょ？」

長富、その場でクンクンと鼻で息を吸って、

長富 「小西くん、大丈夫だよ？」

小西 「え？」

と、恐る恐る自分も息を吸って確認。安堵して、

小西 「冷や汗かきましたよ」

と、額にびっしりといった汗を拭う。

山根 「死因は、酸欠です」

小西 「え？」

山根 「液体窒素は気化すると七百倍もの体積になります。換気
しているので少量なら大丈夫ですが、この瓶には狭い空
間なら一瞬で窒素を充滿させるだけの量が入っています」

小西と長富、六畳ほどの小実験室内を見回す。

山根 「瓶は15分で満タンになります。いつもあのタイマーが
15分にセットしてあるので、スイッチを押したらタイ
マーも押してから隣の研究室で待つようにしています」
と、壁のキッチンタイマーを指す。

長富 「こんな立派な大学でも、随分アナログなんですネ」

山根 「国立大なんてこんなもんです。きっと論文で頭が一杯で
タイマーを押し忘れたんです。慌てて戻った時には瓶が

ら液体窒素が溢れ出てしまってたんだと思います」

小西 「えっと、つまり？」

山根 「その状態で一息でも吸ったら、命はありません」

と、ボタンを押して供給装置を止める。

長富、壁のタイマーをじっと見つめる。

00:00 の表示。

6.

ラーメン屋（昼）

長富と小西、カウンターでラーメンを啜っていて、

小西 「なんで僕が生きてあんな人が死んじゃうんでしょね」

と、呑気な顔で、カウンター上の魔法瓶のピッチャ

ーから水を注ぐ。

長富、手帳を見ながら考え込んでいて、

長富 「あのさ、あの小部屋の中さ、特にエアコンも付いてない

し、ちょっと暑いくらいだったじゃない？」

小西 「ええ。今年の夏は暑いです」

と、グツとコップの水を飲み干す。

長富 「マイナス19.6度が沸点なら、あんな所置いたらすぐ気

化しちゃいそうだけど、なんで僕ら死ななかったんだろ」

小西、パツと得意げな顔になってピッチャーを指し、

小西 「……これ、ですよ」

長富 「え？」

小西 「僕も同じことと思って山根さんに教えてもらったんです」

長富 「もったいぶないで教えなよ」

と、小西を小突く。おとなしくなって、

小西 「あの金属の瓶が、魔法瓶みたく二層になってるっていう」

長富 「なんだ。よくもそんだけのことであんな顔できたね」

小西 「（いじけて）知らなかったくせに」

長富 「でも瓶の口は空いてたじゃない。上から出て行かないの」

小西、再び得意げになって、

小西 「中の液体が冷えてる限りは、上の口から気化した窒素が

蓋の役割をするから大丈夫らしいです」

長富 「……どういこと？」

小西 「……いや、意味までは」

長富、考え込み始めて、

小西

「もしかして、山根さんが事故に見せかけて殺したとか考
えてるんですか？ それは無理ですよ。今日の朝、研究
室どころか研究棟にいたのは原中先生だけだったって」

タイマーの音。長富、ポケットや懐など至る箇所を
探して、ようやくタイマーを取り出す。

小西

「あ、それ持ってきたんですか？ まずいですよ」

長富

「（人差し指を口元に）あとで返すからいいんだよ」

小西

「国立大学の備品ですよ。税金泥棒ですよ」

長富

「うるさい、税金泥棒は君だよ」

小西

「……どういう意味ですか？」

そうこうしていると、一人でにタイマーの音が止む。

長富、タイマーの表示を見る。00:00の表示。

小西

「僕だって、頑張ってるんだけどな……」

長富、タイマーの「秒」ボタンを一度押して、「ス

タート」を押す。すぐさまアラーム音が鳴る。

長富、今度はタイマーの「ストップ」を押す。

00:00の表示が00:01に戻る。

長富、ハッと気づいた顔。

小西

「長富さん、ラーメン伸びますよ……」

テーブルの上の小西のコップ。側面には水滴。

（後編に続く）